

# 未来

全労協・郵政ユニオン  
九州地方本部  
機関紙・「みらい」  
NO. 2463  
07年2月16日(金)  
・Fax 095-828-1953  
E-me-ru webadmin@  
yuseiunionkyusyu.jp  
郵政ユニオンホームページ  
<http://www.yuseiunionkyusyu.jp/>

## 夢はきつとかなう 4・28反処分闘争最高裁で勝つ 職場復帰のために 池田実さんが決意を述べる

仲間と競争せず、弱い人と共に団結して闘おう。

なくそう差別！運転免許証の本籍地記入をなくそう！



今日は四・二八特集号です。最高裁で勝利した池田さんが寄稿してくれました。

おはようございます。

夢はきつとかなう ちよつと言葉、手垢にまみれたようなこの言葉が、今は素直に口から出る。二月三日の最高裁決定の報を受け、徐々にその勝利を実感しつつある。今実現しないから夢なんだ、と言われるが、実現する夢もあるんだ、と何か人ごとのように職場復帰について思いをはせる今日このごろだ。



最高裁決定の翌日、さっそく元職場の赤羽郵便局に出社し、職員たちに「二八年ぶり職場復帰決定」の報告レターを手渡す。「昨日最高裁決定が出て赤羽に戻ることになりました」と言いながら出勤する職員たちにはレターを差し出すといつもは受け取りを拒否する職員までもがふつと耳をかたむけレターを受け取るではないか。「ええ、そつなんだ」「よかったね」「うそ」「ふだんは見られない驚きの反応が。ゆづメイトの仲間からは入り口でおめでとうと言います」と固い握手。

管理者連中も今までは全く違う反応。総務課長に「出勤しにきました」と言いつつ最初は「聞いていない」と相手にならなかった当局だが(本場に知らなかったようだが)、新聞記事を見せつけながら「もうこれは最終決定」と説明すると、ようやく事態の真実がわかったようで労担が「上司にきてみる」と言いつつあわてて局内に戻る。マイクで「完全勝利しました」「今日から復帰します」と繰り返す。

いつものように管理者が数名出てくるが、元気なく下を向いているよう。「今日は抗議に来たのではない。帰属会社の内定や職場訓練の日程、共済組合の手続きとかいろいろな事務手続きの話に来たんだ。相手にしない総務課長に「入れない」と欠勤になってしまつ」と言いつつ支援の仲間からなぜか失笑が。



名出てくるが、元気なく下を向いているよう。「今日は抗議に来たのではない。帰属会社の内定や職場訓練の日程、共済組合の手続きとかいろいろな事務手続きの話に来たんだ。相手にしない総務課長に「入れない」と欠勤になってしまつ」と言いつつ支援の仲間からなぜか失笑が。

やがて労担が出てきて、支社からの指示を伝えてきた。「今日の午後総務課長が支社に呼ばれている。そこで支社と話しあいその結果は支社の法務からあなたに伝えまふ」と言いつつ。もう赤羽当局では対応できないというわけだ。それまで「待つてください」と言いつつ。

まあ、そついつことだったら今日のところは引き揚げることにする。「待つ」ということは「自宅待機」ということか。いきなり、「それでは今日八時半から勤務してください」と言われてはまた心の準備、体の備えが出来ていないので、「ちよちよつと今日は年休にしてください」と言いつつだが、まあしばらく(何週間?)はインターバル期間といつことだ。

その日は携帯電話が鳴り止



まなかつた(前日夕方から)。「おめでとうございませう」の祝福の嵐聞き取れなくて誰だろつ」と思いながら「ありがとつございませう」とお礼の返事を言ったのも数人いた(コメントナサイ)。遠くはフランスから福のメ

が、今回はやはり最終確定とすることで内外、各地から数多くのお祝いの言葉をかけていただいた。本当に「自分は幸せものだ」と思った。連れ合いからは「事故に逢わないように気をつけてね」と言われたが、本当に郵便局に戻れるのか、これはウソではないのか、とまだ郵便配達をするという実感がわかないのが正直な今の心境。

とりあえず、今は気持ちを郵便配達モードにリセットし、体も筋トレでもして二八年間の贅肉をそぎ落とすよう頑張れねばと真剣に考え始めたところだ。

九州のみなさんには本当に長い間あたたかい励ましをいただき、ただただ感謝の一言です。近いうち再び長崎に



行き、みなさんと勝利の美酒を汲みかわすのを楽しみにしています。

(二月一日、池田実)

編集部から  
この本紙「未来」の四・二八特集号は94年の4月28日から始まり、今年でまる12年を数えます。回数で行くと310回も名古屋さんと池田さんが「未来」を書いた計算になります。すごい執念と思いを感じます。

そしてこの2月13日、免職取り消しの最高裁判所の決定が出され、郵政への職場復帰が法的には現実の問題となりました。

また、91年の全国大会で四・二八反処分闘争の終わりを決め、原告団の組織的排除を行った全通も、ある意味責任を問われるでしょう。

長い、長い、29年間。彼らのご苦労をねぎらいつつ、これまでこの闘いに

関わり、その勝利にいくらか貢献できたことを本誌も喜びたいと思います。

(未来編集部一同)